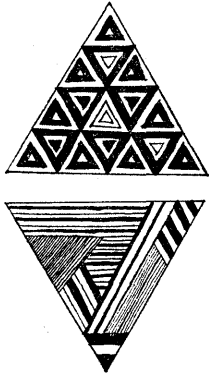


近代短歌に現われた子ども (二十)

大塚 雅彦



(八) 明石海人『白描』

昭和十三年一月から刊行され始めた『新万葉集』改造社)は、この種の短歌のアンソロジーとして画期的なものであったが、その第一巻はライ歌人明石海人(かじん)をトップとし、ライ園短歌を大きくクロージアップして江湖につたえる契機となった。ライ歌人として全国最初の歌集は島田尺草の『一握の蘂』(昭和8)であるが、『日本近代文学大事典』によれば(藤田福夫執筆)、尺草は明治三七年福岡県生、大正十二年秋に九州療養所(後の菊池恵楓園)に入り、医官の内田守人博士(「水甕」同人)に短歌を指導され、同療養所の短歌誌「檜の影」に拠って作歌を続けていた(後に「水甕」にも入会)のである。

明石海人は明治三十年に静岡県に生まれた。静岡商業を卒業し銀行員となり、結婚して二人の女兒を得たが、二八才でライを発病し各地を転々として療養、最終的には昭和七年に岡山県の長島愛生園に入園し此処で生を終えた。入園後間もなく園の機関誌に短歌等を発表し始めるが、昭和十年前川佐美雄の「日本歌人」に投稿し、同人として遇され、以後同誌での活躍はめざましい。翌十一年、前述の内田守人が愛生園に転任して来た。内田は改造社の『新万葉集』の企画を知り、全国のライ療養所に檄を飛ばして短歌応募を呼びかける。そして、実に五十余名の療養所歌人が入選し、社会に注目された。特に海人の十一首が収録され、多くの人々から激賞されたことは意義が大きかった（ちなみに後出の伊藤保の七首も収載された）。内田博士は海人歌集の刊行を改造社に謀り、昭和十四年二月、遂にその歌集『白描』は刊行された。これは二万部売れたというから、その反響の大きかったことが知られる。例えば昭和二三年に刊行された東大総長南原繁の歌集『形相』^{けいそう}には、集中の昭和十四年作

に「頼に生れその身くずれつつ歌いあげし明石海人の白描も読みぬ」という作品があるのも、その一例であろう。

海人はその後も各誌に短歌や随筆を寄稿していたが、昭和十四年六月、腸結核で逝去、三十七才であった。「臨終にも葬式にも肉親は誰一人出席せず、淋しい告別式であった」（松村好之『慟哭の歌人——明石海人とその周辺』昭55・6）という。通例ライ患者たちは入園に際し家族との縁を絶ち、出生地や本名は匿されて生活するのであるから、無理もない。没後『海人遺稿』（昭14）や『明石海人全集』全二巻（昭16）や『明石海人全歌集』（昭53）等が刊行されている（大塚注——本稿の海人の略歴等は、主として松村前掲書や、『日本近代文学大事典』の項目——佐藤芳幸執筆——等によった）。なお、海人の「人とその文学」については内田守人『日の本の頼者に生れて』（昭31）や、松村前掲書等が詳しい。

①さらばとてむづかる吾子をあやしつつつくる笑顔に妻を泣かしむ

②年を経て帰る吾家に手童の父とは呼べどしたしませず

けり

③ふたたびを訪^{おと}ひてよとねもごろにわが童^{わらは}は我をもてなす

④大きな踊り花笠もてあますをさな女童^{めわら}の手ぶりは愛^{かな}し

⑤ありし日の吾兄がおもみの覚ほゆるこの片言ぞ乳の香にしむ

いずれも『白描』より抄いた。①は「診断」という大項目の中の「家を棄てて」という一連にある。昭和三年春、彼は東大病院皮膚科で診断を受けライと告げられ、深刻なショックを受けた。万斛の涙を呑み帰宅して家族に告げ、職も辞した。そして明石の病院に入るべく家を棄てるのであり、①はそのための悲痛な家族との別れがうたわれている。②は「各地の療院を転々すること数年、癒ゆべき望みも失せて帰郷」の詞書があるので、歌の背景がよくわかる。た童^{わら}（たは接頭語）は「お父さん」と呼んでくれるが、長いこと離れていたの、はにかんで、親しんでくれないのだ。③は「日を経る儘になじ

みをそめたる子はお八つの菓子等を頒^{わか}ちつつ」の詞書がある。やっとなじみはじめたわが子は「また来てね」とねんごろにこの父をもてなしてくれる、もう二度と帰れないと心に期しているこの父の心情を知らぬげに――。

そして「週日の後、国立の療養所に向ふ。この度は帰りに見む日もはかり難ければと、妻は子を伴ひて停車場まで見送る」の詞書のある「母^{おちち}父^{おちち}に手をとられつつ興じやまぬこの幼きを別れゆかむとす」の歌が次に続いている。

当時癩者は皆、このような慟哭の別れをして入園したのである。④は「盆踊り」一連にある。これは園内の盆踊りだろうか？「いちやうに朱^{あか}の花笠ひるがへす盆の踊り」とこの前の歌にある。大きな花笠をもてあます幼ない女童の踊る手さばきに愛憐の情をおぼえているのだから。しかも園内の女兒とすれば尚更である。⑤は「乳臭」一連にある。「あやされて笑ふ^{こわ}声^{こゑ}音も乳の香もこの鳥にして児^このめでたさ」「片言^{かたこと}のこゑの清^すしさかたぬ我^{われ}抱きねと言はれて児^こをおそれぬ」の二首に続いているので場面がわかる。作者は嘗て一人の女兒を喪っている。かた

る(ライのこと)の身を遠慮しつつ、「抱きなさい」と言われて他人の児を抱き、その片言や乳の香に亡児を思い出しているのである。

(二) 伊藤保 『仰日』 など

伊藤保もまたライ歌人としては最も知られた人物の人である。ちなみに昭和十年代の前半は、ライ患者やライ関係の文芸が世人に大きく注目されブームを起した年代であった。昭和九年に全生病院(当時、土地の人から「お山の地獄」と呼ばれたという——小坂富美子『病人哀史—病人と人権』昭59・7——)が、後の多摩全生園である)に入園した北条民雄の名作『いのちの初夜』が『文学界』昭11年2月号に発表され、文壇に衝撃を与えた(民雄の『人と文学』については、園の療友であった光岡良二の『いのちの火影』(昭45・7)に詳しい)。また、既述の小川正子『小島の春』と明石海人『白描』が刊行されたのが、それぞれ昭和十三年と十四年である。「それをブームと呼ぶならば、それは短いブームであつ

た」(松下竜一『檜の山のうたびと』昭和49・9)が、しかし「むしろ私たちは、北条民雄や明石海人が緒を展いた獺文学が、伊藤保によって大きく深く集成されたと評価すべきではなかるうか」松下、同書)といわれる程、伊藤の存在意義は大きいようである。

伊藤保は『定本・伊藤保歌集』(昭39・11)巻末の略年譜によれば、大正二年大分県に生まれた。そして九州療養所に入所したのは昭和八年である。妹勝代(12才)も一緒であった。この妹は後に所内で患者同志の結婚をする。夫と療養所を脱走したりするが、昭和二四年、二九才で死去する。兄の保は神経ライ(乾性)であつて、北条民雄や明石海人等が肉体の急速に崩壊してゆく結節ライ(湿性)であったのに較べて、膿汁で病み崩れていくような悪性のものでなかったことは、幸いしたようである。後に保は昭和十五年、所内で十才年下の少女井手とき子(17才)と結婚し、園内に夫婦舎が出来て、そこに住む。二度ほど彼女は妊娠しようだが、患者同志の子を生むわけにはいかない。愛生園々長光田健輔は、男

の側の断種手術を前提にしてむしろ結婚を奨励したといわれ、これは光田方式とも呼ばれたが、これに対しては種々の批判もあつたようだ。伊藤の居た菊地恵楓園では、光田方式のように結婚は公認されず、黙認の形で許されていた。軽症の妻とき子は、まめまめしく伊藤の世話をした。しかし伊藤は、これも恵楓園のライ歌人として著名な津田治子と恋愛感情を持って、相聞歌を作っている（治子の「生涯と文学」に就ては大原富枝『忍びてゆかな——小説津田治子』〈昭57・6〉が詳しい）。戦後の伊藤はライ予防法改正運動に参加したり、「黒髪小事件」（恵楓園に入園している患者たちの子どもが住む竜田寮の児童——健康児を、黒髪小学校が通学拒否をした事件）や死刑囚藤本松夫救援運動等にかかわり政治的・社会的活動もした。しかし彼の本領はやはり「桜の影」短歌の重鎮としてすぐれた歌を作り続けることであつた。昭和二九年には歌誌「未来」（近藤芳美主宰）にも加わる。三一年には失明に近い状態になる。三八年九月末に津田治子が死去するが、それから一ヶ月半後の十一月十

六日に伊藤も長逝する。四十九才であつた。

彼の処女歌集『仰日』（昭25、九州アララギ会刊——後に二九四首を追加して東京の第二書房より再刊）は世評高いが、この他に『白き桜の山』（昭33）があり、更にこの両歌集作品及びそれ以後の作品「霜天集」を収めた前述の『定本・伊藤保歌集』（昭39）がある。

① たまゆらは息深く吸ひしみどりを生くると思ひて抱き上げにき

② 響して地震すぐるとき標本壇に嬰兒ら揺るるなかの亡き吾子

③ 吾子を墮ろしし妻のかなしき胎盤を埋めむと来て極りて嘗む

④ 通学出来ぬ子らを護りて食を断つ吾らにきびしき放送のこゑ

①と②は『仰日』より抄出。①は「熟桃」一連にあり、②は「仰臥雑詠八」一連にある。前述の如くライ園では子を産むことは許されず普通は三ヶ月で墮胎させられたが、伊藤夫妻のこの場合、胎児を研究対象とするため、

七ヶ月頃まで放置されたケースであるらしい（松下、前掲書）。考えてみれば惨酷な話であるが、七ヶ月でとり出された胎児を詠じた歌が①であろう。一読胸をつかれる内容である。この前後に「七月ななげにて生れて拳こぶしがほどの生子こいくらも泣かず死にゆきにけり」「柔毛じゆうもう立ちて露のひかれる熟桃じゆんぼうをもぎてあたへむ子のわれになし」等の秀作がある。②はまた深刻な歌だ。この世に生をうけることを拒まれた胎児たりしわが嬰兒が他の胎児と共に標本壘たいほんに入れられてあり、それが地震の響きで壘もろともに揺れているのだ——それを見ている作者。私はこのようなユニークで、真率沈痛な歌を読んだことがない。類例がないのだ。③と④は『白き松の山』より抄出。二度目の妊娠による胎児は三ヶ月で墮ろされた。③はその折の作で、驚くべき内容だ。松下竜一は「かなしきは哀しきであり、それ以上に愛しきであろう。この一首を胎児へのそして妻への愛の極致表現だと評した歌人もあった。本当に胎盤を管めたのだろうか、伊藤流の仮想演技ではないのかという卑しい疑問も、この一首を貫く尊厳がお

のずから峻拒してしまっている」（前掲書）と述べている。短歌史上にも未だかつて現われなかった内容の絶唱だろう。④は前述の「黒髪小事件」を詠じている。「子の学ぶをねがひて吾ら食断つに市民らこばみ群れて旗立つ」等の歌が続いている。

（木）『木がくれの實』と『陸の中の島』

ライ歌人たちの合同歌集を二つ挙げておこう。その一つ『木がくれの實』は多摩全生園武蔵野短歌会編で昭和二八年三月、岩波新書として刊行されている。園長林芳信の序文、歌人山下陸奥の序歌、作家阿部知二や歌人五味保義の「あとがき」がある。編さん委員として園内の主要歌人五名が当り、その一人鈴木楽光の「まえがき」もある。それによると園開設四十周年記念行事として計画されたもので、委員による互選でまとめたものを、「多摩」(全生園機関誌)の短歌欄の選をしている五味保義(「アララギ」)の目を通してもらったという。集録人員六十八名、作品は実に一三七七首に及ぶ。

一方、『陸の中の島』の特色については私も嘗て一文を草したことがある（歌誌「地表」昭33・2月号所収、拙稿「名もなきものの歌(二)——『陸の中の島』について」）が、これは昭和二十二年七月、全国々立療養所ハンセン氏病患者協議会（「全患協」）が刊行している。歌人土屋文明（「アララギ」）の序文と全患協事務局長光岡良二の「はしがき」があり、歌人中野菊夫（「樹木」）の「あとがき」もある。全国十一の国立療養所、三つの私立療養所（共にいずれもすべて全額国庫負担）等の作者二七九名の作品をまとめたもので、「全国療友の詞華集が一本に編まれるのは、今回が最初」という。各自卅首の出詠を各園短歌グループで自主的に粗選したものを、事務局で調整し、最終的に中野菊夫がまとめたものである。両書とも本名を秘しての入園生活、家族との隔絶、神経麻痺、脱毛、上肢萎縮や下肢切断、失明等々の肉体苦など、精神的肉体的苦難が、あますなくうたわれている。一九四三年からアメリカの癩園で試用され、我国では昭和二十二年に東大薬学教室で合成に成功し、厚生省により全国療養

所に支給されるに至ったプロミンの出現は、ライ治療にとって画期的な福音であった。こんにち、初期患者ならばプロミンで必ずなおるといふ段階にきている、といわれ、遺伝でなく伝染病であり、しかも伝染性は極めて弱いといわれるハンセン氏病は、いづれわが国では患者がなくなるかもしれない。しかし嘗て小川正子が、親子夫婦が互いに永久の別れをせねばならぬこの悲しき病いを「世になからしめ」とうたったように、患者らの人間性を刻印する作品が世にのこっていることを、われわれは忘れてはならないであろう。

- ① すがり寄る子を出しやりて療院にいく仕度の吾が
手にぶりぬ (⊕) 白鳥とし子
- ② にべもなく幼児こどもが云ひしをまた思ふ「指の曲ったお
父ちゃん嫌い」 (⊕) 田井吟二郎
- ③ 患者地区よりわがこえ行けず船上に子らの振る手が
遠ざかり行く (⊕) 高石泰三
- ④ 殺菌ランプつけて親子が向ひ合ふ面会室に注意書が
あり (⊕) 笠居誠一

⑤ 久々に妻と来し娘のさげがみを撫でつつ沁々癒えたりけり (㊦ 加藤三郎)

⑥ 病むわれを訪れて来し吾子の嫁背中に小さき手が動きみる (㊦ 志村清月)

⑦ 車より降り立つ吾子をかき抱く足病む吾はよろめきなむ (㊦ 二宮美穂)

⑧ 癩を病む父とは知らずめたるらし会へば俄に吾子は泪ぐむ (㊦ 山崎進志郎)

⑨ 妹と同じ年頃と思ふ子よ赤き斑紋の頬を寄せゐる (㊦ 国本昭夫)

⑩ 癩院に梅の花咲き盛りつつ杖つき習ふ子の小さき音 (㊦ 故鈴木庫治)

⑪ 少女寮より歌きこえくる一時のありて朝の茶妻と飲み居り (㊦ 早瀬信太郎)

⑫ 悲しみの聖母の御絵を持ちて来しこの少女と吾と励ましあひぬ (㊦ 北海薫風)

⑬ 寮主任を母と呼びゐる子の声の絶え難き迄胸にひびけり (㊦ 芝山輝夫)

⑭ 癩園に育くまれゆく未来も駿河学園より来たり劇見する兒ら (㊦ 高原 出)

⑮ 癩児ひとり山羊と遊べり苦しみは知らざりし日の吾かと思ふ (㊦ 室町史朗)

⑯ 八年の前に別れし子等にして吾を父とは呼ばなくなりぬ (㊦ 永井鉄山)

⑰ 川一つ隔てて町の子供らが病める我らを蔑みて呼ぶ (㊦ 志村清月)

①は「癩発病して入院せし当時を思ひ起して」の詞書がある。溢れる悲哀。②はこの病のための肉体的変化が子に突かれた愕き。③は健常者世界に住む子らとの断絶。④から⑧までは面会の折を詠じたものだろう。⑨から⑮までは 園でこの病いを病む子ども達の種々の姿がうたわれている。「赤き斑紋」はむろん、この病いの症兆である。⑯は久しき子との隔絶のかなしみ。⑰は一般社会の子ども達からすら受ける差別と侮辱であり、屈辱と悲哀の極まりというべきであろう。

(お茶の水女子大学)